

## リバーフロント整備センター設立20周年記念座談会 ～国際ネットワークについて～



### 出席者：

玉井 信行 金沢学院大学大学院 特任教授  
吉川 勝秀 日本大学理工学部 教授  
白川 直樹 筑波大学システム情報工学研究科  
講師  
清野 聡子 東京大学大学院総合文化研究科  
助教授  
中村 圭吾 (独)土木研究所水環境研究グループ  
主任研究員  
中村 哲巳 (社)建設コンサルタンツ協会  
河川計画専門委員会 委員長  
池田 満之 旭川流域ネットワーク世話人  
竹村公太郎 (財)リバーフロント整備センター  
理事長

### (司会)：

佐合 純造 リバーフロント整備センター  
技術普及部長

(本稿は、平成19年7月24日に座談会を行ない、紙上スペースの関係で、編集部責任により編集したものです。)

**【司会】** (財)リバーフロント整備センターが発足して20周年記念ということで、国際ネットワークの座談会を始めさせていただきます。まず、竹村理事長から挨拶をさせていただきます。よろしくお願いいたします。

**【竹村】** おはようございます。リバフロの竹村でございます。本日は本当にありがとうございます。リバフロ20周年になりました、皆様方のご協力です。特にこの国際ネットワークは新しいテーマで、まだ歴史がほとんどありません。これから育てていくテーマでございます。ですから、今まで進めてきたこの国際的な活動に対して、これから、将来どんなふうやっていくかということを中心として、皆様方のご意見を賜ればと思っております。

20周年ですので、思い出話と将来の展望というところですが、将来の展望をよろしくお願いいたします。特に水フォーラムというような形で国際的なムーブメントが起きつつありますが、水

フォーラムはNPOとして自由にやっている部分があります。私も国土交通省河川行政の関連機関としてはどのようなことができるのかということ、是非、ご示唆をいただければと思っています。

### これまでの国際活動を振り返って

**【司会】** それでは、座談会に入りたいと思います。まず、これまでのリバフロにおける国際ネットワークを含めた活動全般についてご意見をいただければと思います。最初に、玉井先生いかがでしょうか。

**【玉井】** これまで続けてきたリバフロの国際活動、特に学会発表や海外調査については、今後もぜひ継続されることをお願いします。特に学会発表については効果的なテーマや発表場所を選んでほしい。何を選ぶかは少しサーベイをするなり、この財団の活動の目標との対応を考えるとということが必要だと思います。



玉井 金沢学院大学大学院  
特任教授

、特に学会発表や海外調査については、今後もぜひ継続されることをお願いします。特に学会発表については効果的なテーマや発表場所を選んでほしい。何を選ぶかは少しサーベイをするなり、この財団の活動の目標との対応を考えるとということが必要だと思います。

**【中村(圭)】** リバフロの国際活動全般への感想ですが、これまで相当海外の調査もされていて、その報告書類もかなりストックされていますので、その辺の蓄積を取り出しやすい形に、具体的に言えば無理に紙資料にしないで、例えばホームページ上に掲載するとか、これまであった国際情報を棚卸しして、できるだけ取り出しやすい形にするというのがいいんじゃないかなと思います。



中村 圭吾  
(独) 土木研究所水環境研究グループ 主任研究員

、その報告書類もかなりストックされていますので、その辺の蓄積を取り出しやすい形に、具体的に言えば無理に紙資料にしないで、例えばホームページ上に掲載するとか、これまであった国際情報を棚卸しして、できるだけ取り出しやすい形にするというのがいいんじゃないかなと思います。

**【玉井】** 中村(圭)さんも言われたように、例えば国際活動の成果はたくさんあるわけですね。それが書庫にあって、取り出せないというような状態は改善しないといけないですね。それと、私も翻訳に参加したこともありますが、やはり言葉の問題は、端的に申し上げて、リバフロの日常活動を国際的な

場で発表するなり、紹介するというのは大変なハンディであって、それが課題だと思います。海外調査(情報収集)も、発表を英語で出しているとすれば、国際ネットワークにそのままデータベースとして登録できるわけですが、そういうことがスムーズにできないのは課題であって、それをどう克服していくのかということも、今後の活動の中で考えるべきことだと思います。

### 国際ネットワークの役割は

**【司会】** はじめにご説明するのを忘れちゃったんですけど、リバフロがどうしてARRN(アジア河川・流域再生ネットワーク)/JRRN(日本河川流域再生ネットワーク)を取り組んでいるのかということですが、本来、このようなネットワークづくりは国がやるべきことなのか、また、民間でもいいんじゃないかなどいろいろ議論はあります。国がやるとなると、自由がきかないんじゃないか、一方、民間だと営利的になっちゃう可能性がある。そういうことで、国でもない、民間でもないという、公益法人であるリバフロが中立的な立場でやるのが一番よいのではというのが大きな理由です。ただ、内容をどうするか、参加の対象者をどうするかというのは課題でして、たとえば、NPOや一般の方が会員のうち4.5%ぐらいしかいないということで、一般の方々にあまり浸透していないという問題もあります。これからどのような対象に重点をおくかも含めて、走りながら考えているというのが現状です。

**【中村(哲)】** このネットワークの目的ですが、技術情報を共有して交換していく。それは、我々の民間の技術者にとっても大変喜ばしいことで、ぜひ進



ARRN/JRRNの活動概要



中村 哲巳  
(社)建設コンサルタンツ協会河川  
計画専門委員会 委員長

めていていただきたい  
と思います。ただ、その  
中で、我々として何が  
お手伝いできるかを考  
えています。前もリバフ  
ロからもいろいろ相  
談を受けましたが、一  
つは、民間からどう  
いう情報発信がで  
きるのかというのを  
考えたときに、私ども  
コンサルタントという

立場では情報が出  
づらと思います。我  
々が持っている情  
報は、業務上、入  
手したものが大変  
多いので、オープン  
にするときにはい  
ろんな意味で難し  
いかなと思っています。  
一方、会社独自の  
例えば技術情報  
とか、そういうも  
のが出せるかとい  
うと、それもタイ  
ムリーには難し  
いかなというところ  
があります。では、  
民間の立場として  
他に何かできるこ  
とはないかという  
ところですが、今  
までいろんな蓄積  
情報があります  
ので、それをただ  
単にそのままデー  
タベース化しても  
なかなか使いづ  
らいところがある  
かと思っています  
ので、そこに少し  
付加価値をつける  
ような、特に技術  
情報についてい  
ろんな分析を踏  
まえて整理する  
とか、そういった  
面ではいろんな  
提案ができる  
のではないかと  
思っています。そ  
ういうところで  
何か手伝える  
可能性があれば  
考えていきたく  
思っているのが  
、今の全体的な  
感想です。

**【吉川】** 自分の経験ですが、以前に民間のコンサル  
タントの人に入って  
もらって議論して  
いたとき、その人  
が中東の水辺の再  
生はこんなのがあ  
りますよという情  
報を送ってくださ  
ったこともある。  
コンサルタント協  
会で雑誌を出して  
いますが、そこで  
紹介されている  
情報を広く発信  
してもらいたい  
ということもある  
のではないかなと  
思います。

**【玉井】** たえば仕事を獲得する  
という意味で、  
コンサルタント  
なり、建設業界  
の方が国際的な  
入札とかいう  
ときに、日本は  
こういう情報  
があるとか日

本はこういう実績  
があるということ  
が、一般的なソ  
ースが知れ渡っ  
ているということ  
でそれに貢献で  
きるかという  
か、あるいは入  
札の場合、立場  
が有利となる  
ことがあります  
か。リバフロに  
こういうデータ  
が蓄積してい  
てそういうもの  
が国際的に認  
知されている  
と日本の企業  
は非常に有利  
になるとか、  
日本の研究者  
が非常に理解  
してもらいやす  
くなるとか、  
そういう可能  
性はありますか。

**【中村(哲)】** そういうものが  
当然知れ渡ってい  
れば、実際はど  
うなるか分か  
りませんが、優  
位になるよう  
な気はいたしま  
すね。分かっ  
てもらっている  
ということに  
なりますしね。

**【司会】** 清野先生、学会活動  
だけではなくて、  
いろいろ国内  
の地域活動も  
お手伝いされ  
ておられます  
が、そういう  
観点からARRN  
の活動とか、  
リバフロの  
国際活動とい  
うのはいかが  
ですか。

**【清野】** 私が交流している  
分野というのは、  
農学、生物、  
市民活動です。  
こういうリバ  
フロの活動で  
海外の方が日  
本に講演に  
来てくださ  
って、きちん  
と通訳もつ  
いてい  
るのは非  
常にいい  
サービ  
スだと思  
います。特  
に湿地保  
全だとか  
自然再生  
に関して  
は、日本  
になんか  
情報が  
入ってこ  
なかつ



清野 東京大学大学院総合  
文化研究科 助教

た時代に、市民  
の方がほん  
と自分の余  
暇を使って  
自費で各地  
に行ってい  
るんですね。  
例えば湿地  
保全のラム  
サール会議  
なんかも、  
日本人では  
学者より  
市民の方  
のほうが  
数十年前  
から多く  
行ってい  
ます。そ  
ういった  
活動は公  
益法人と  
かそうで  
ないところ  
が協力し  
てやって  
くださら  
ないと国  
内に広が  
っていか  
ない実情  
がありま  
す。まだ  
途上だと  
は思いま  
すけれど  
も、公益  
法人とし  
て知りた  
い情報  
というの  
を少し  
ずつない  
でいただく  
役割をし  
てきた  
というの  
は、かな  
りいい  
仕事だ  
と思いま  
す。

ただ、願  
わくは、  
もうちょ  
っとい  
ろんな  
蓄積し  
たデー  
タを出  
してい  
た  
だき  
たい  
と思  
いま  
す。報  
告書  
で  
が  
ち  
り  
し  
た  
も  
の  
を  
英  
文  
で  
数  
十  
ペ  
ー  
ジ  
と  
い  
う  
と、  
結  
構  
ハ  
ー  
ド  
ル  
が  
高  
い  
と  
思  
う  
ん  
で  
す  
ね。  
一  
方  
で、  
前  
に  
も  
ご  
提  
案  
し  
た  
か  
も  
し  
れ  
な  
い  
ん  
で  
す  
が、  
例  
え  
ば  
リ  
バ  
フ  
ロ

さんの方が海外に行って、自分の視点でこれは大事だと思うようなところがあったら、そういった代表写真を、個人の思いとか感想も含めて書いていただくといいと思います。割にハードルが低いし、意外とそういう中に技術者としての視点というのが入っていて、正式な報告書よりも情報が多い場合があるんです。特に市民で活動されている方が悩んでいるのは技術がその国に置かれたときに、実現するものとしめないものがあることです。それが何なのかというのは国際比較をする中で初めて分かってくることがあると思うんですね。だから、河川工学や水文学の分野で、そういうユニバーサルな知識とか技術というのを日本に紹介されるというのも非常に大事ですし、社会的な流れとか生態学的な流れの中でその技術がどう生かされているのかというのは、意外とそういうスナップショットからヒントが得られるような気がするんです。

**【白川】** 清野さんのお話の中で比較ということが



白川 筑波大学システム情報工学研究科 講師

出てきましたが、大切なことだと思います。20年間国際活動を重ねていくなかで、まず事例を知る、情報の量を積み重ねていくということが大事ですけども、一定の時期に来たところで、だんだん質を考えるようになっていかないといけない。い

ろいろな情報がある中で、ほんとうに需要がある情報とそうでもないもの、どういうところにどういう需要があるかというものとだんだん合わせていって、情報の質を高めていくことは必要だと思うのです。情報を使う側にはいろいろなニーズがあるので、一次情報で出したほうが使いやすい場合もあれば、ちょっとまとめた形で出したほうがいいのかもあります。自分の興味対象のメインではないけれども、必要となりそうな情報であれば、まとまった形で整理されて出されたほうがいいのかと思うのです。ですからいろいろなものを見るとか、工事をするという段階から、次はそれらを比較してまとめるといったメタ的な研究が必要になってくると思いました。

**【司会】** 池田さん。NPOの立場というか、何か

ご意見をお願いします。

**【池田】** 結局、このネットワークというか、今や



池田 旭川流域ネットワーク世話人

っている組織というのが、誰のための、何のためのものなんだろうという疑問を持ちます。これは、業界のための組織づくりなのかなという感じにも見えてしまいます。

しっかりとしたコンサルタントが入って、専門家が

入って、国際的に闘える日本としてのしっかりとした権威のある組織をつくるということがこのネットワークの目的で、そこを目指しているのであれば、今やっている内容は間違っていないと思います。ただし、それが目的ならば、それに興味のある一部のコンサルタントとか大学の先生とかの人たちしかメンバーに入らないだろうと思います。ということは、今の200人の会員数からは大して大きくならないだろうと感じます。

また、情報の出し方については、もうちょっと幅広い人たちとか、NGOとか一般の人たちにも分かりやすいものにしてほしいと思います。今、出ているホームページを見たときに、一般の人たちにとって、ここからどれぐらい自分たちが使える情報があるのかが分かりにくいと思います。河川再生事業の工事とか、護岸改修とか、そういった一部の専門的レベルにはいいかもしれませんが、例えば市民レベルとか、一般社会が考えているかわり合いとかに比べられるレベルには対応できていないように思います。とりあえず、学会、業界レベルできちんとやって、これで国際社会でも闘えるぞというのを指すのであればいいんでしょうが、そうではなくて、ほんとうの意味で流域再生の国家全体の社会のあり方にかかわるような役割を果たすのであれば、今のやり方ではまだ視点が狭過ぎると思います。

**【吉川】** 私は限られた中でよくやっているなど思っているんです。スポンサーであるとか、どう動かしていくのかというロジスティックスの部分は、今言うことやこしくなるので、後で言いたいと思います。

それで、三つほどあるんですが、一つはこれをや

ることの使命というのがやっぱりあると思っています。国内の使命というのも結構大きいと思うのです。私は、もともとスタートが学者じゃないし、市民グループでもないで、ちょっとそういう意味で失礼な言い方をするかもしれないんですが、市民も学者もコンサルタントも、やっぱり自分が興味があることで物を見ている。それから、行政の人も、私は行政の中にいたんですけど、海外に行く機会が少ないわけですね。だから、そういうところに、ある市民は、ある興味で、あることを持ってきて、国際的にこうですよと言っているし、学者もそう言います。だけれども、もう少し幅を広げて、いろいろな情報を出していくということで、国内的な使命というはあると思うのです。

それからもう一つは、アジアを中心に、国際的貢献ということ、義務としてしたほうがいいだろうなという部分です。だけれども、そういうことをやっていると、例えば数年前に玉井先生が、中国の北京で、川と都市の再生の情報を提供してくださったことがあったんですが、アジアに貢献するということのほかに、中国とか、シンガポールとかいろいろ見ていると、日本と随分違う枠組みでものごとが先に動いているということもある。勉強することも非常に多いなという感じがする。そういう意味での位置づけもあるのではないかな、と私は思っています。

それから三点目は、一応その核が要ということ、韓国と組んで、何らかの形で玉井先生なんかにも応援してもらって、中国とまで一応組んできた。これを今までのような形ではなく、もう少し窓口を広げて機会をつくるという形で、参加国を広げていったほうがいいのではないかな。そんなことを今思います。

**【司会】** 一通り、全般的な印象も含めて、感想も含めてご意見をいただきました。次に、個々具体的に活動の内容についてご意見がありましたら。

**【吉川】** 私自身が昔ここにいたこともあって、このキャパシティというのが大体見えちゃっている部分がある。それを補う意味で他からも専門家に来ていただいているんだろうと思うんですが、それでも限界がある。だから、たとえば、中村（圭）さんにはあなたも中心でやって下さいと頼んだりしていたんですが、何かそういう人を何人か持って、一緒

に動いていただくという形をとって、外に出ていって発表し、発表しながら勉強していくというメカニズムをちょっと入れた方がよい。今の枠組みの中で一生懸命やっているのは見えるけれども、そこでどまっちゃうという気が私はしているんです。

**【玉井】** 今のはリバフロの国際化というふうにも言えるような課題ですね。リバフロの職員なり活動も国際化に対応するなり、あるいは、このネットワークの事務局として機能的に活動できるようにするにはどうしたらよいかというところではないかと思えます。

**【吉川】** 玉井先生がおっしゃられているのは、リバフロの国際化ということは、技術普及部だけで抱えるんじゃないで、もっといろんな部局で、むしろそっちのほうが実務をやっているわけだから、今はほとんど孤軍奮闘しているんだろうと思うんですけど……。

**【玉井】** リバフロに限りませんがこれまでは外国から日本が知識をいわば輸入するというか、学ぶという姿勢ですね。簡単に言えば、これはまさに明治時代の姿勢です。今や発信というか、日本側からの発信が重要な時代で、それが、さっき吉川さんも触れられたんですが、国際的な使命であります。実はリバフロ自体の活動を国際化しようとか、あるいは、日本の存在感を高めようとするのが、日本の機関の使命でもあります。そこに変わってきているというのが基本的な私の理解で、そういう時代であるというふうに思えます。

**【清野】** 国内でだれをパートナーにするかという一方で、例えば今結構、海外調査に大学院生とかが行くような時代になりまして、日本の川は知らないのに、海外の川に詳しい人とかがいるわけです。だから、日本の川を海外に紹介するのもあるでしょうし、そのコンタクトパーソンがあったり、その紹介先のホームページでお薦めがあればいいですね。日本人が海外の川を、特にアジアの川を理解するときに、どこだったらこんなポイントで見られるというような、そういった視点というのは大事なかなと思います。

日本人のサービスとしては、逆に英語がバリバリできるという人だけじゃなくて、このホームページは分かりやすいとか、そういうもうちょっと日本人

がアクセスしやすい立場で海外を紹介するのもあると思います。もう一方で、私、先年のメキシコでの世界水フォーラムのときに気づいたんですけど、日本の河川で国際的に名前が出ているところというのがほとんどないんです。一方で、メコン川とか、セーヌ川とか、結構知られているじゃないですか。日本の川を紹介するページもリバフロさんはつくっていらっしゃるんですけど、日本に来たとき、川とか流域でここを訪ねてみたいと思うような、そういう発信というのは多分結構大事です。日本の川の認知度を高めていくということ、それによってその川でどういう再生が行われてきたのかという、事業もあるでしょうし、もうちょっとトータルな河川管理とか、流域の管理とか、人々の暮らしなど、いろんな切り口があると思います。日本の川自体をやっぴり見つめ直すというきっかけとして、海外にどう説明するかというのはいいチャンスなのかなという気がします。

**【白川】** 何もしないと全く伝わらないですよ、まじめにやっているというだけでは。学生に世界の川について調べると言うと、彼らはインターネットを見て外国のサイトからデータを持ってきます。各国の川が並んでいるそういったリストには、例えばヨーロッパやアフリカの川はたくさん載っているのに、日本の川はほんの少ししかなくて、しかも変な選び方をされていたりします。世界ではどんなことが行われているかといったレビューのようなものにも、日本のことはなかなか出てきません。

**【中村(哲)】** 今回のこのネットワークをつくられたときに、例えば中国とか韓国は、日本に対してどういうのを期待しているのか。その辺は何か、聞かれているのでしょうか。まず相手が必要としていることを知らないと、こちらの情報の出し方も難しいのかなと思います。その辺はいかがでしょうか。

**【玉井】** その点では、私の経験では、日本が経験してきた順番と同じことがほかの国でも起こるわけです。例えば中国であれば、現実問題とすると水質汚染を解決したいという、日本で言えば30年ぐらい前の問題に直面しています。ただ、研究者なり行政の担当者は、それより先のことを見ているという場合も多いと思います。水質のほうは現実を解決しないといけない。一方、研究者達には、自分たちの仕

事はその先のことという問題意識もあるわけですね。だから、そういう人は、自然再生とか、川の再生とかいうのを見ているわけです。だから、やっぱりあまり一様というか単調ではなくて、重層的に重なっているのは間違いないと思うんです。

**【吉川】** ある程度の骨の部分をつくらないといけない。学者にも、市民団体にも、八方美人をやっていると、みんな物足りないと言われてしまうと思うのです。どこかに少し軸足を置いて、多少ずれがあったとしても、軸足を置かないと、誰からもあしらわれてしまう。中村(圭)さんに補足してもらいたいんですけど、ヨーロッパのネットワーク(E C R R)というのは、どちらかというと行政か、行政に近い人が少なくとも立ち上げからある時期まで主役で来たと思うのです。基本的には物をつくっていく人たちのネットワーク。それに学者も若干入るし、市民も入る。何かどこかに少し軸足を置いて動かないと、全部に対応しようとする物理的にも無理だし、軸ができないと思うのです。私はそう思うのです。

**【中村(圭)】** E C R R(ヨーロッパ河川復元センター)は実務担当者や行政の人かなり多いですし、それに関連して、応用研究に興味のある研究者、かなり組織のしっかりしたWWFのようなNPOが入って、実務レベルでの技術的な話もできますし、意思決定の苦労話みたいなのもお互いシェアできるという感じになっていますよね。E C R Rは、そういう意味では、かなり実務に近いというか、行政に近いという気はします。

**【司会】** 他に何か。

### 結構面白いメールマガジンの情報

**【中村(圭)】** 吉川先生のほうから、キャパシティの問題点とも言われましたが、今のキャパシティから考えると、一番まず力を入れるのはメールマガジンですかね。最近の自然再生の情報とか、「おっ!」と思えるような情報が整理されているので非常に面白いんですね。ただメールマガジンはまだあまり知られていないんじゃないでしょうか。ですから国交省の職員にしても、現場の人にしても、NPOの方にしても、大学の方にしても興味のある人に毎週メールが来たら結構面白いと思うんですね。ま

ずはそういうのを活用して、興味のある人をつかまえて、そこからホームページに来ると面白い情報があるという仕組みになっていると、かなりすそ野が広がるんじゃないかなと思うんですね。そういった意味で、つかみの素材はできてきているので、それをまず知ってもらおうということと、そこからホームページに来たときに、やっぱりこのホームページのいわゆるデータベース機能というか、情報能力ですよね、ここがかなり充実してくるとさらに何か面白いこととか、何かこのネットとつき合っていると面白いなという気分になってくると思うんですね。

**【中村（哲）】** 中村（圭）さんが言われたように、いろんな話題があって、タイムリーな話題が入っているので大変面白いのですが、ただ、結構ボリュームがあって、私にとっては全部見るのはちょっと大変なところがあります。それで、少しの時間を置いてしまっ、後になって、こういうのがあったなと思って古いメールで見ると、ホームページ上から消えてしまっていることが良くあります。過去の情報の蓄積とか、検索とか、その辺は今何かされているのでしょうか。

**【事務局】** 情報源はあくまで新聞社等が掲載しているものなので、著作権の問題があり、我々の方からそれをメールに載せて発信することはできません。今現在は実際に新聞が掲載しているタイトルを少し変えて、タイトルだけを見ても内容が想像できるような形でこちらのほうで修正して発信しているのが実態なんです。また、大体、毎週700、800ぐらい集まった情報の中から30ぐらいまで絞って発信しています。

**【中村（圭）】** だから価値があるんです。セレクトしないんだったら、今、グーグルとかで全部アラートで出せますから。やっぱりある程度厳選されているものが来ると助かるんです。

### ガイドラインや論文情報の発信も有益

**【司会】** ARR N/JRR Nの活動の一つとしてガイドラインの整理も手がけているのですが、これに関してはいかがでしょうか。

**【中村（圭）】** ガイドラインはやっぱりある程度交通整理するんでしょうね。ガイドラインがたくさん

あっても、いいのものから焦点がずれているものまであるので、その辺はある程度情報を整理すると、いいのではないのでしょうか。

情報としてはガイドラインもありますが、論文なんかで結構、応用面で役に立つものもあります。例えば環境流量の話なんか論文でも相当出ていますので、そういったものを合わせて整理されるとよいのではないのでしょうか。やっぱり論文のほうが情報は早いですからね、あと、自然再生だとそれぞれの国の省庁がレポートを書いている場合があります。その国の言語で書いていたりする場合はあるんですが、図を見れば、ある程度何をやっているかが分かるので、結構そういうのが面白い。例えばオランダの二次流路の話とか、スキヤーン川の調査のレポートなんかオランダ語やデンマーク語で出ています。

**【清野】** ガイドラインのデータベースなんですけど、これは結構重要で、先ほど、項目で整理されている主としてキーワードを並べておけば、別にそこから先は見の人が頑張っ、見ればいいので、このガイドラインは意外と入手できなかつたりするものですから、これはぜひ整備をお願いしたいと思います。例えば環境流量の議論なんかでも、河川管理者のほうとか電力会社とかは、結構ガイドラインの話をよく知っているんだけど、市民側は何かそういうものがあることも知らなくて、それで議論がすれ違うことがあるんです。だから、それは河川工学以外の分野もそうなんですけれども、だから、ガイドラインとしてやっぱり国内外で整備されてきたものは、非常に市民参加とか、いろんな分野の研究者の参加の上で基礎情報として大事なもので、ぜひそこはこれから充実させていただければと思います。

**【司会】** これからは、今後期待することを重点的にご議論をいただければと思います。まずは池田さんからお願いいたします。

### 分かりやすい情報提供が必要

**【池田】** 一つはやっぱりほんとうのプロのための組織なのか、さっき吉川先生が言われたように、軸足を玉虫色にしちゃうと結局みんな中途半端でだれも使わないものになるから、一つの柱をきちんと持たないといけないと思うんです。たとえば、まず、

国際社会に通用できる日本のきちっとしたレベルを保つ内容のことはちゃんとやってほしいですし、活動範囲については視点を流域という広い視野から見たら、都市という視点とかも持たないと、日本としてもこれからの河川再生とか自然再生は難しいと思うので、そういった視点も広く先駆的に取り上げてほしいと思います。

それから、情報公開についてですが、さっきのガイドラインとかの情報や行政やコンサルといった人はいろいろ情報入手ラインを持っていますが、一般の人はそういうところのアクセスがほとんどできない、どういうところにあるかすら分からないことを考えると、一般の人たちに情報を提供できる場があるということは、すごく大きなことだと思うので、その辺はぜひちゃんとやってほしいと思います。さっきのホームページを見やすい利用しやすいものに、メルマガともども、それができると大分良くなると思います。その際、だれが見るのかということも考慮して、見せ方、情報の伝え方を工夫した方がいいと思います。プロのコンサルしか読めないような内容で書かれたら、それ以外の人は理解できないので、情報は読む対象者を意識した掲載レベルの使い分けが要ると思います。ただ、実務を担うキャパシティの問題で難しいとの意見はあるので、その辺をうまく今後の体制につなげていって、国際社会に通用する価値のあるネットワークになることを期待したいと思います。

**【司会】** ありがとうございます。さっきの4.5%にしかなPOさんとかには関心を持って参加していただいていないのですけど、やっぱりそのハードルというのは何なのですかね。

**【池田】** 今のホームページを見ると、これはコンサル、プロユーズというのか、一般のNPOとかではちょっと取っつきにくいという感じがします。業界用という感じがすごくあって、業界の人には受けまですけどね。その辺はホームページの出し方とか、載せ方、同じ情報でも、伝え方、出し方の問題になってくると思うんです。

**【白川】** そういう意味では、今のものは一次情報を重視していて、深く知りたいという人、あるいは、実際に今から何かをやる、困っていてこれを解決したいという人に向けたような形になっているかと思

うのです。それを加工して二次情報にして、例えば小学校の総合学習の時間に使えるようなものにするとか、個々の事例を見ていくだけでなくそれらをパターン化したり分類したりして見せるという、その部分があるとよいのかと思います。長く継続するためにはコアとなるものをつかまなければいけないので、一次情報として深いものが必要でしょうけれど、より多くの人に見てもらうためには、浅さというか広さというものも必要です。そのためには、これはアジアとヨーロッパの違いかもしれないのですが、忙しいということを前提にして、忙しい人がちょっとした時間を使って見ても、ある程度頭の中が整理される、分かったような気になれるというような整理をした部分というのが表のほうにあると、取っつきやすいのかなと感じます。逆にそれだけでは続かないので、きちんと知りたいと思ってくる人の欲求が満たされるような、深い一次情報の部分も保持しつつ、両方をやっていかなきゃいけないと思いますけれど。

**【清野】** 市民活動とか、学会活動のような草の根って、わりと個人の熱意で、あるレベルまで動いてきて、それにみんなが入ってきてというステップと思うんですね。ですから、このネットワークも、ぜひ、事務局がチラシを配るぐらいして、こういう情報があったから、あそこに送ってあげようとか、そういうのはあると思います。それから、運営グループみたいなもので、もう少し人が見えるような形でウェブマスターとか、運営グループとかで、こういう人がいるのでしたらこういう情報かなというふうに見えるというのも、こういったメディアの運営の仕方としてはあると思います。もう一つ、さっきビジュアルの話をしたんですけども、都市河川で、今は日本の川で猛烈に汚れているところは意外と少ないんだけど、もしかすると、また今後そうなるっちゃうおそれもあるわけですね。例えば世の中が混乱してしまうとか、災害があったらという、またその時期に後戻りする可能性もゼロではないと思うんです。そういうことも含めて国内の事例を整理して、さっき白川先生がおっしゃるように、環境学習の材料に国内でも使うとか、あるいは、その材料が、日本でもこういう時期があって、それを克服していったというのも伝えるような、そういう素材を持つ



ているということも重要かと思えます。

**【司会】** 民間のコンサルタントさんから見て、まだ物足りないところもあるかも分かりませんが、何かこれからぜひということとは……。

**【中村（哲）】** 情報の提供というか共有というか、そういう点については、方向性は大体望ましいと思えます。欲しい情報の種類としては、今やられようとしている内容でおそらく良いと思えますが、ただ、先ほど白川さんも言われていたように、情報の質ですか、その点でやはり少し工夫をし、できるだけ付加価値を高めるようにしていただければと思います。さらに、使い方についても、効率的な検索とか、そういった形のものにしていただければいいのかなと思っています。ただ、それだけでは、我々としては情報をとりにいくだけということになってしまいます。そのような十分な意見交換ができない部分については、何か別な形、ここで言われているイベントとか、そういう情報交換ができるようなものも、別途いろいろ開催していただき、そこで意見や情報を提供できるようになればいいのかなと思います。

#### 都市の河川再生もテーマに

**【玉井】** 今後に期待するという意味では、私は、自然再生に極限しないほうがいいんじゃないかと思えます。川の再生ということで、リバー・リストラクションですから問題ないですね。特にリバフロとすれば、いわゆるスーパー堤防、高規格堤の事業部、第1部がありますね。あそこはまさに都市と川という問題。センターには自然にかかわる部もありますね。ですから、川の再生という考え方は、リバーフロント整備センターとしては非常に適していると思います。両方やらないといけないという役割を持っているわけなので、そこはそう考えたほうが私はいいと思います。それから、NPOの方々の参加が少ないなり、情報の発信をどうするかというのは、やはり一つだけでは難しいのではないかと。ですから、ワーキンググループ的なものを考えるとすれば、要するに二つやっぱり必要なのではないかと。一つは世界の国との競争で考えるような部分と、もう一つは国内の川の現地のことを考えるような部分とですね。ですから、少なくともそのぐらいの組織的にも仕分けがないと、なかなか永続的に対応するのが難

しいのかなという気はします。

国際的な場での活動ということ、リバーフロント整備センターだけで、職員だけでというのは大変難しい。ですから、そこは、財団はいわばコーディネーター役というか幹事役が主で、やっぱり関係する方々、それとか会員がいますよね。一つは、例えば会員の方々がアジア地区の国際会議で発表するとか、あるいは、リバーシンポジウムに行くとかそういうときに、自分の所属部門と、例えばARRN/JRRNの名称をくっつけてもらうことが考えられます。そういうような形で広げていくなり、それからARRN/JRRNの存在も認めてもらうなり、あるいは、関係する人もそういう分野で活動していますよということをしてPRできるような、そういった組織づくりとか、ある種の体制を組んでいくということも一つ可能性としてはあると思います。

**【中村（圭）】** ARRNの特徴というのをうまく打ち出していく必要があるという気がしています。そういう意味で、先ほどご指摘もありましたように、やっぱり河川再生のなかでも都市河川の再生ですね。都市域での自然再生というのは、日本はかなり経験が豊富だと思うんですね。欧米の例を見ても、都市河川の再生の事例は少ないですね。やっぱり日本のいろんなケーススタディはかなり参考になって、おそらくアジアで河川再生といった場合に役に立つと思います。例えば今、中国の都市域で、11カ所ぐらい、河川の自然再生が動いているんですね。都市河川の再生をARRNのひとつの軸足にしていくというのはあるかなと思いますね。

一方では、海外から学んでばかりでもしようがないという話があるかもしれませんが、やっぱりヨーロッパの自然再生の仕組みとか、実際やっていることはかなりまだまだ参考になることもあります。リバフロで昔かなり集めたのは、いわゆるドイツ語圏の資料が多かったと思うんですが、最近、水梓組み指令の関係で、いろんな動きがヨーロッパの中にあります。いわゆる旧東ヨーロッパでも河川再生が今動いているんですね。そういった情報なんかもECRRともう少し情報を密にして、こちらのサイトの中でも流していくとか、そうした努力がいるのかなと思います。ECRRとは会議にお互いに人を出し合うなど、そういった活動が重要じゃないかなとい

うような気がします。

先ほどメルマガが結構面白いという話をしたんですけど、そういった点では例えば世界の自然再生の情報メルマガとか、面白いのではないのでしょうか。グーグルなんかで検索するとアメリカの河川再生の情報がものすごく入るんですよ、びっくりします。やっぱりアメリカなんかは随分河川再生のニュースって流れているんだと思います。こうした世界の情報がある程度セレクトして、今のメルマガの発展形として英語の河川復元に関するメルマガというもの一つはあるのかと。そういうのがあるとARRNって面白いねという話に少しつながっていくんじゃないかなと思います。

**【吉川】** あまり時間がないので項目で言っていきたい。今、どう長く続けていくかということを考えていけない時期に来ていると思うのですが、水フォーラムでみんなハイテンションのときに打ち上げて、それを実際にやっていくというのはなかなか難しいことです。玉井先生の熱意と、リバフロで一応フォローしてきたところだと思うのです。当初のころに国土交通省から受託でやればという議論があったのですが、公益法人としてやったほうがいい、必要だったらリバフロの研究開発基金を使ってもやったほうがいいというのが私の考えだった。さっき言った国内的な使命と国際的な貢献という部分として、苦しくても、そこにやっぱりもう一回踏み込んできっちりやったほうがいいのではないかと思います。縮小タイプではなくて、やったほうがいいんじゃないかなというのの一つなのです。それから、ECRRでやっているような、数年に1回の国際会議のアジア版をそろそろやっちゃったらどうか。自費で来てくださいと、案内はアジアだけではなくて、世界中に出しておけばよいと思うのです。そして中村(圭)さんが言ったように、きちっと報告してもらったことをきちっとストックするというのをもうそろそろやったほうがいいのではないかと。

それから、国内もそうですし、玉井先生が言われ

たように国外のものにも参加するということ。私の関係では中国とタイとの国際会議として5年目のものを今年やったり、また、国際舟運会議を大阪でやりします。そういうものに事務局が顔を出して情報を集めたり、人の関係をつくっていくというようなことをやったらどうか。

もう一つ、四国地整の菊池さんと以前この議論をしたときに、国土交通省の人間がアジアに専門家やアタッシュとしていっぱい行っているけど情報面では浮いている面がある。これらの方々にも参加してもらおうということを考えてらどうか。ルートをつくったらどうかということがあると思うのです。

### まとめ

**【司会】** 最後に玉井先生、ARRNの会長でもありますが、ARRNの事務局へのアドバイスも兼ねてまとめをよろしくをお願いします。

**【玉井】** このネットワークはリバフロ20年の中では新しいものです。今後どう考えていくかということについては、今日いただいたような意見を具体化するためにはどうするかという課題、それはARRN/JRRNとしての課題でもあるし、それをもとに韓国と中国との議論をするという土台にもなり得ると思います。特に、継続というのがどの組織も非常に重要な課題ですので、地球のサステナビリティも大事なんですが、個々の活動団体自体もサステナブルでないところも考えながら今後、活動を続けていきたいというのが運営側の立場であります。それから関係者としてみれば、そういう形でリバフロにも大いに頑張っていたいただきたいということだと思います。これが今日のまとめでしょう。

**【佐合】** どうもありがとうございました。今後のネットワーク運営に参考になることばかりだったと思います。ぜひ今回のご意見を生かして、次のリバフロ30年にはもっと充実させて、有益な活動ができるようにしていきたいと思っておりますので、引き続きよろしく願いいたします。